国史跡　土丸（つちまる）・雨山（あめやま）城跡

写真（雨山遠望）

名　称／日根荘遺跡（ひねのしょういせき）

所在地／大阪府泉佐野市土丸 971 番 2 外 66 筆等（水路敷を含む）
　　大阪府泉南郡熊取町野田 72 番外 4 筆（里道敷きを含む）

面　積／泉佐野市　71,581.08㎡
　　熊取町　　85,784.80㎡

概　要／日根荘域に立地し、南北朝から戦国時代にかけて日根荘と深く関わりのあった土丸・雨山城跡が平成 25 年 10 月 17 日に日根荘遺跡の一部として追加指定された。

発　行／くまとり「ドキドキ博物館」実行委員会
（構成団体）熊取の歴史と文化を学ぶ会・ビーズ教室「虹色のたね」
　　山野草クラブ・わたっ子クラブ・手打ち蕎麦クラブ
　　NPO法人 摂河泉地域資源研究所
発行日／平成 26 年 11 月 8 日
監　修／熊取町教育委員会

土丸（つちまる）・雨山城跡（あめやまじょうあと）

平成21年度より泉佐野市教育委員会と熊取町教育委員会が合同で土丸・雨山城跡の文化財調査を実施し、和泉国屈指の山城である南北朝期から戦国期（1300～1600年頃）にかけての土丸・雨山城の全容が明らかとなった。

調査の結果、雨山と土丸山（城ノ山）の2つの山頂には中世の城郭に関わる曲輪、武者隠し、堀切、井戸など当時の遺構が発見され、雨山城跡と土丸城跡は一体の城（＝一城別郭）であるという見解が示された。

詳細な築城年代は不明だが、当時の文書等の記録からおそらく南北朝の頃に築かれたものと考えられる。

両山の裾部西側には樫井川が蛇行して流れ、南面は峡谷となって、紀州と和泉を結ぶ粉河街道、河内へ抜ける水間道、大木道など主要街道の結節部に位置している。またこの2つの山頂からは極めて優れた眺望が確保できたようである。そういった戦略上、重要な立地にあったこの城では、日根荘の荘官であった日根氏をはじめ楠木正勝や細川頼元、山名義理、橋本正督など有名な武将がこの城に関わり、城主になって周辺の土地と住民を統治することを狙って城の争奪戦（合戦）が頻繁に繰り広げられた。

さらに戦国期の日根荘の領主であった九条政基が1501年から1504年までの4年間、領有する荘園の直接支配のために京都からやってきて、仮の住まいとして選んだ長福寺で記した滞在日記「政基公旅引付」でも、住民が戦乱から身を守るために山入りや山籠りをしたとの記述がある。

また、古来から雨山踊り、土丸のこおどり他雨乞い信仰・習俗が強く残るとともに、用水の水源としての機能を残しているのも特徴である。

以上のように日根荘の盛衰とともに機能し、終焉を迎えた山城であるが、地域の人々によって代々この山城は守り伝えられ、当時の政治的拠点として、現在まで当時の遺構を良好に残す中世の代表的な山城として非常に重要である。

雨山を望む

七曲りの山道

堀切に架かる土橋

山道に残る、江戸時代の町石

七曲りが終わると鳥居が見える

雨山神社

和泉国における戦国時代の城郭

高槻市立しろあと歴史館　中西裕樹

1　はじめに

和泉平野から眺めて一際「目立つ」山に立地する土丸・雨山城跡。城跡からは日根荘に加えて大阪平野や大阪湾、淡路島が一望でき、眼下には紀伊国へと続く入山田方面の谷筋。

大阪平野を見下ろす山城は数少ない。飯盛山（四条畷市・大東市）や芥川城（高槻市）は戦国大名三好氏らの大規模な政庁で居住施設や芸能挙行の場【図１・２・３・(参考)】。そして背後の山間部との間に軍勢が行き交う。

⇒中世の山城は、軍事施設であるとともに地域支配の装置。山城から見下ろす風景は、その存在を認識する人々が暮らす場であった。しかし、土丸・雨山城跡は決して大規模な山城ではない。戦国和泉の城郭とは？摂津国や河内国（特に南河内）も参考に。

2　和泉国の状況－構造と分布から－

基礎資料は、城跡の地表面を観察した「縄張り調査」の成果。さらに文政元・２年（1818・19）に岸和田藩士の浅野秀肥が作成した『和泉国城館跡絵図』（大阪歴史博物館蔵）や岸和田古城跡などの発掘調査のデータ増加。

【構造と分布】２つのタイプで城郭を把握

Ⅰ型…曲輪と切岸、堀切で基本的な城域を設定する一般的な山城。土丸・雨山城跡（図４）、蛇谷城跡（貝塚市、図５）、興蔵寺城跡（熊取町・図６）、宮里城跡（和泉市・図７）。

Ⅱ型…Ⅰの周囲に帯曲輪や横堀による防御ラインを付加するもので、永禄年間以降（16 世紀の後半）の近畿地方における城の特徴。千石堀城跡（貝塚市・図８）、久米田貝吹山古墳（岸和田氏・図９）、根福寺城跡（貝塚市・図 10）。

→南河内を含む分布状況（図 11）。Ⅱが平地（千石堀城跡・久米田貝吹山古墳）と山間部（根福寺城跡）に分かれる特徴的な分布。１つの村に複数の城館が存在したような状況は想定しづらく、武家や領主の存在＝城ではない。

- 千石堀城跡は曲輪を造成しない臨時的な築城＝陣城の特徴。歴史的にも羽柴秀吉の紀州攻めに備えた根来寺方の城郭のひとつ。

- 久米田貝吹山古墳の発掘調査では墳丘に横堀がめぐる構造が判明。永禄５年（1562）に三好実休が畠山氏、根来寺と合戦を行なった際の陣城との評価。

- 根福寺城跡は府下でも大規模な山城。横堀や和泉国唯一の「畝状空堀群」を備えた高い軍事性。
  しかし、曲輪は明確で陣城ではない。

【南河内の状況】半数以上がⅡのタイプ。上赤坂城跡（千早赤阪村）や金胎寺城跡（富田林市）、烏帽子形城跡（河内長野市）など、紀伊から南河内へのルート沿いに分布する特徴。その背景にはルートを利用するパ

ターンの大きな軍事動向が想定。

河内では紀伊国守護を兼帯する守護畠山氏の勢力が畠山義就派、同政長派に分裂。戦国時代を通じて勝者が守護所高屋城（羽曳野市）に入り、敗者が紀伊国へと没落。両勢力による戦争は南の紀伊から北へと軍勢が進出するパターンを生み、ちょうど南河内が「境目」に（表１）。

→根福寺城跡の維持主体は、紀伊国の根来寺。根来寺は和泉国南部（泉南）と南河内の村落を勢力基盤の一つとし、戦国末期の両地域は強い影響下。畠山氏が河内国に高屋城を構えたのとは異なり、根来寺は和泉国内に拠点を設けず、その支配は村落の地侍層を通じたもの。

⇒根来寺は紀伊と和泉間のルートを重視し、根福寺城跡を念入りに整備。かつ、根来寺は政長流畠山氏と結んで和泉国で勢力拡大。再三の畠山氏の紀伊没落をふまえると、和泉の山城は広域の軍事行動に関わり、根福寺城跡などが中継点となった可能性も。土丸・雨山城跡は？

3　土丸・雨山城跡から見た和泉の城郭

和泉国では土丸・雨山城跡が平野部に対して非常にシンボリックな山に立地し、眺望も優れていた。ただし、武者隠し状の土塁を構築するものの、全体の構造は比較的単純なＩタイプ。

一方、土丸・雨山城跡と紀伊の根来寺をつなぐ地点には、和泉最大規模で軍事性の高いⅡタイプの根福寺城跡が存在。同じ発想の構造で規模も隔絶しないのではないか。

→河内国や摂津国で平野部を直接見下ろす山城は、飯盛山城跡や芥川山城跡などの国の範囲を超える歴史性を持つ巨大な拠点城郭。これらの基本は土丸・雨山城跡と同じＩタイプ。

⇒根福寺城跡は周辺に対する眺望が効かない場所に位置するため、平野部に対する城郭、そしてそれを維持する主体を喧伝するという意味合いで、土丸・雨山城跡がこれに代わる。

泉南の村落など平野部を掌握していた根来寺は、平野部に近い土丸・雨山城跡を積極的に改修する動機を欠いた結果とも解釈。土丸・雨山城跡などの山城は、根福寺城跡を介した根来寺や関係勢力を「見せる」。一体的に機能した可能性。

4　おわりに

○土丸・雨山城跡は、全国的にみれば、決して大規模な城郭ではない。ただし、和泉国内では根福寺城跡に続く規模。根来寺との関わりなどの地域史をふまえつつ、大阪平野周辺の山城という点を勘案すれば、土丸・雨山城跡は、和泉を代表する戦国期山城であるといえる。

○平成 24 年（1 月）河内長野市の烏帽子形城が国指定史跡に。大阪府下においては昭和 9 年（1934）の千早城跡など以来の画期。府下の中世城館の分布調査もスタートし、平地の実態把握も進む（発掘調査）。

○土丸・雨山城跡をめぐる関心の高まりや、地元の盛り上がりに期待。

【主な参考文献】小谷利明　2005「畿内戦国期守護と室町幕府」（『日本史研究』510）、中西裕樹　2002「戦国期における地域の城館と守護公権」（村田修三編『新視点　中世城郭研究論集』新人物往来社）、同 2008「城郭史からみた岸和田古城と戦国期・近世岸和田城」（大澤研一・仁木宏編『岸和田古城から城下町へ　中世・近世の岸和田』和泉書院）、村田修三　1995「雨山・土丸城跡と中世城郭史」（小山靖憲・平雅行編『歴史の中の和泉　古代から近世へ』和泉書院）。

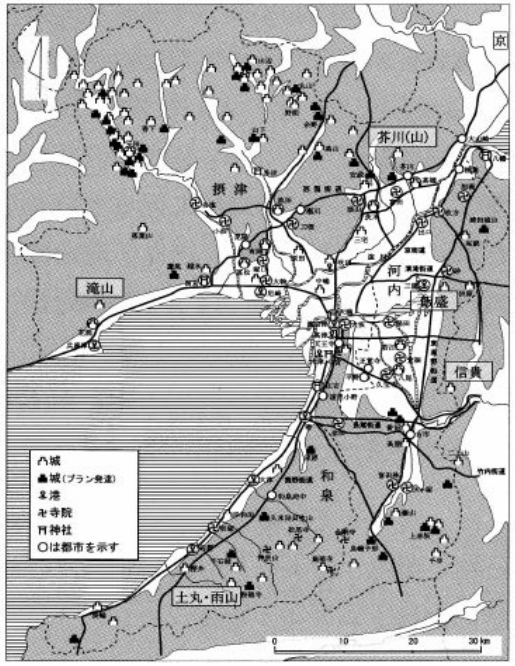


図１　土丸・雨山城跡と
大阪平野の主な城館跡（推定）

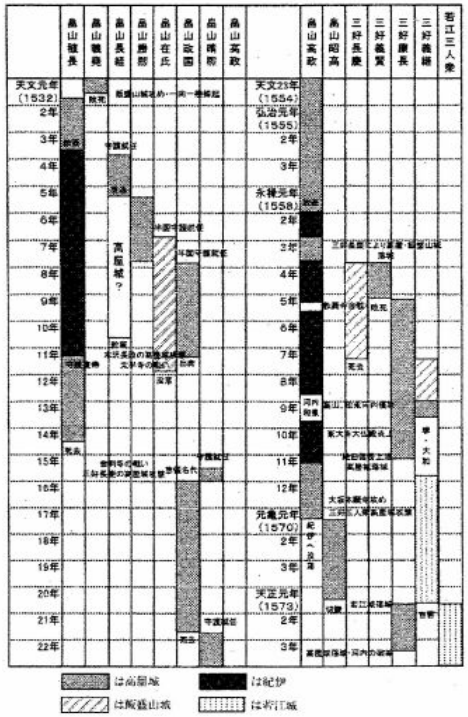
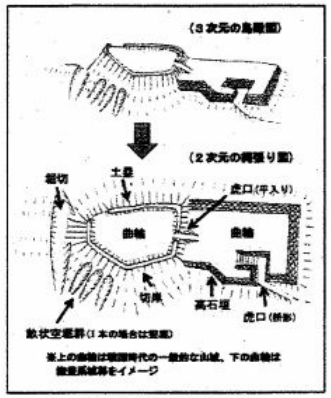


表１　天文年間以降の畠山氏・
三好氏と河内の軍事動向



(参考) 縄張り図の見方

図２　芥川山城跡

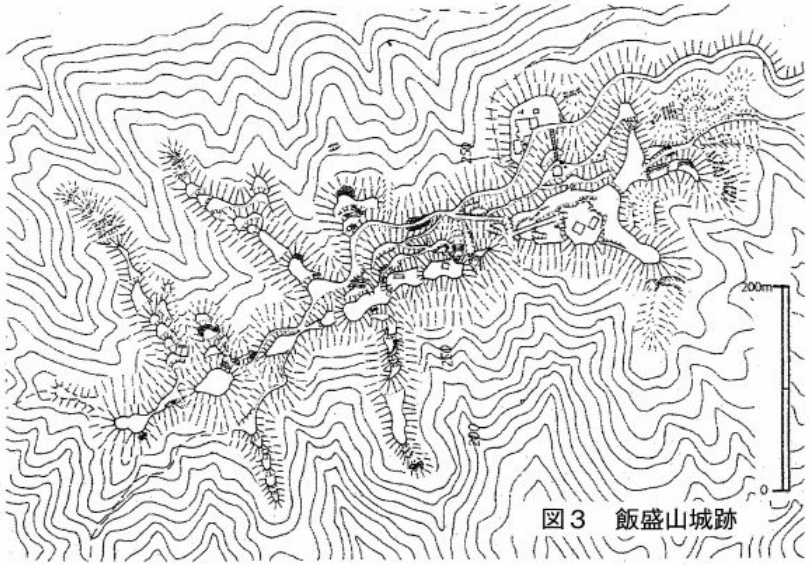


図３　飯盛山城跡

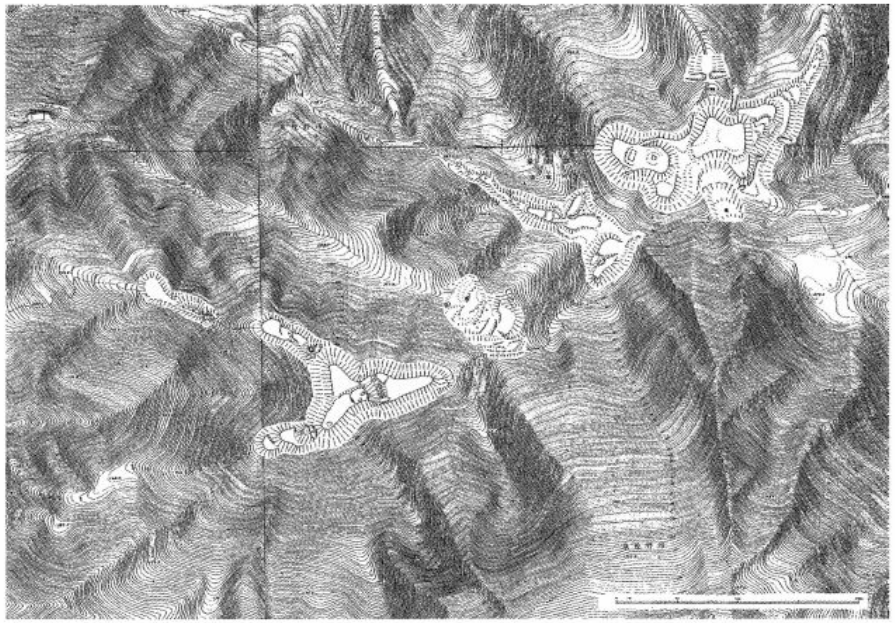


図４　土丸・雨山城跡

図５　蛇谷城跡

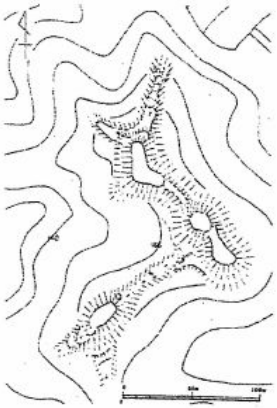


図６　興蔵寺城跡

図７　宮里城跡

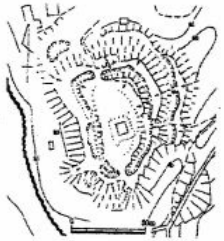


図８　千石堀城跡

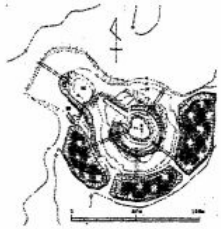


図９　久米田貝吹山古墳
（遠藤恵輔氏作図）

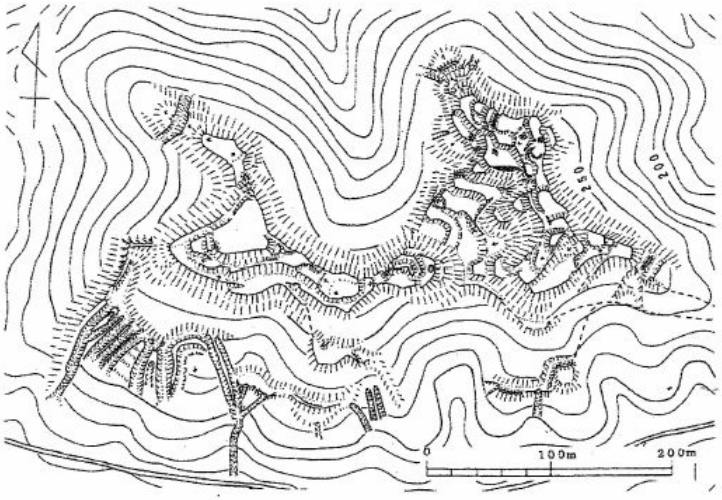


図 10　根福寺城跡（多田暢久氏作図）

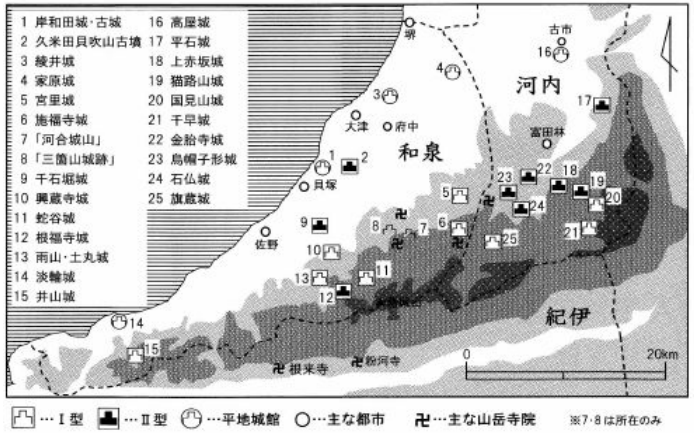


図 11　城郭の分布